

第Ⅳ章 K地区の調査

第1節 K地区の概要と調査方法

1 地区の概要

K地区は、前章で報告したA地区の西に隣接する地区で、A地区と同様に遺跡範囲の北を画する地区である。本地区の地形は、西向きに開口する逆C字形の尾根とその周囲を取り巻く谷筋で構成される。

A地区との間には尾根筋を隔てる鞍部が存在し、それによって隔てられている地形が本地区の東を画する。一方、西側には遺跡中央から海岸部に流れ出す深い谷筋が存在しており、その水系を堰き止めたため池が2か所存在する。この谷筋が、本地区の西端を画することになる。北側にも東西方向に走る谷筋が存在し、その西端は前述の西側谷筋につながっている。北の谷筋は西に比べて谷幅も広く、緩やかな傾斜であることから、その水系を利用した棚田が開墾されているが、現在は耕作が放棄され、草木が繁茂する状況である。

西の谷筋に向かって伸びる2本の尾根は、先端が急峻な斜面となってこの谷に落ち込んでいるが、それ以外は比較的なだらかな斜面である。尾根筋の標高は、A地区で弥生時代の遺構を確認した丘陵部とほぼ同じおよそ150m前後である。

本地区もA地区と同様に、現在は大半が山林となっているが、2本の尾根に囲まれた谷部は、盛土造成がなされ、果樹園として利用されていた形跡が看取できる。

本地区の地質は主に花崗岩を基盤とし、山林の大半で風化花崗岩からなる真砂土の堆積が認められる。南東斜面には、露頭する花崗岩を切り出した石切り場が存在し、切り出す原石を求めて斜面を掘り進んだ地形も残されている。

過去に発掘調査を行った履歴が無く、弥生時代の集落範囲が及ぶか否かの確認が課題となっていた地区である。

2 調査方法

今回の調査は、課題となっていた弥生時代の遺構の有無を確認することを目的として実施した。尾根頂上部や斜面の平坦部に幅2mのトレンチを設定して遺構の有無を確認することとし、尾根斜面に2×2mの調査区を設け、尾根上から流入した遺物の有無を確認することで尾根上に存在する弥生時代の遺構の有無の確認に努めた。調査は令和3（2021）年度に実施した。

調査区は、幅2mのトレンチが4か所（Tr-2101～2104）、2×2mの調査区が3か所（Tr-2105～2107）で、合計の調査面積は90.0㎡である。

検出した遺構の掘り込みは、性格を確認するために必要な最小限度の範囲に止め、必要に応じてサブトレンチ等による断ち割りなどを実施した。なお、本地区においても検出した堅穴建物跡が鍛冶遺構であるか否かを確認するため、遺構埋土を篩にかけ、磁石を用いて微細な鉄器の検出作業を行うとともに、検出した炉跡が鍛冶炉であるか否かを確認することを目的として、金属探知機を用いた磁気反応の有無を確認する調査を実施した。

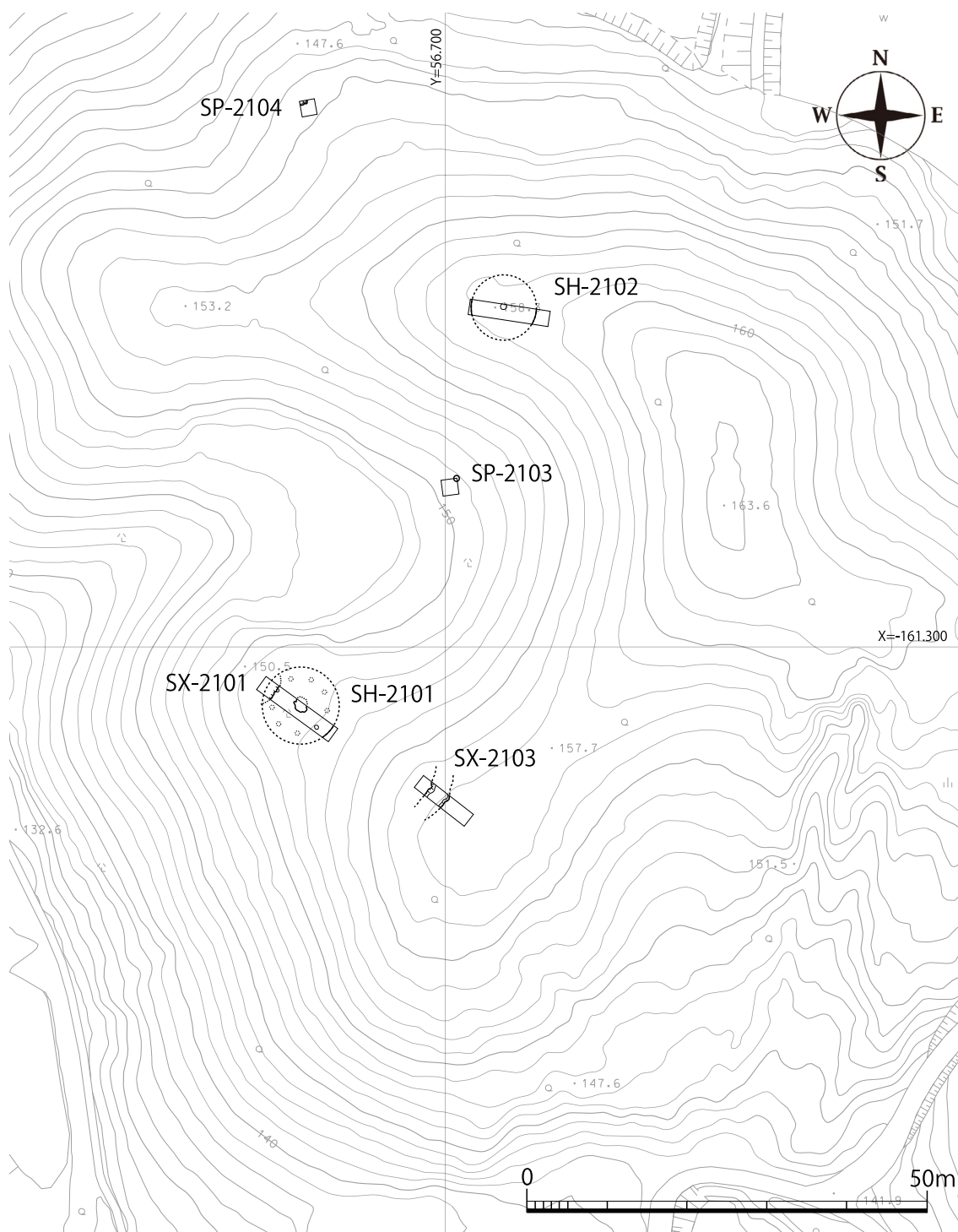


図4-1 K地区の主な遺構配置図

第2節 各トレンチの調査成果

1 Tr-2101

(1) 調査区の概要

本地区を構成する2本の尾根の内、南尾根の北西向き斜面に開けた平坦部に設定したトレンチである。尾根頂上から約5m下った標高151mの場所に開けた平坦部で、平坦な範囲はおおよそ10m四方の広さで

ある。尾根筋に直交する幅2m、長さ11mで、北から55°西に振ったトレンチである。

本調査区では、円形の堅穴建物跡（SH-2101）を検出した。中央土坑や柱穴の位置から、本調査区が堅穴建物跡の中央を横断する場所に位置することが確認できた。床面上から鉄片や鍛冶工具とみられる石器が出土し、被熱した中央土坑上面で確認できた磁気反応から、本建物が鉄器製作にかかわる建物であると判断した。

（2）基本層序

表層は、厚さ約10cmの表土（1層）下に花崗岩風化土である明黄褐色土（2層）が堆積し、地山（15層）に至る。地山は、花崗岩の風化土で構成される。トレンチ北西端では、堅穴建物跡を壊して掘り込

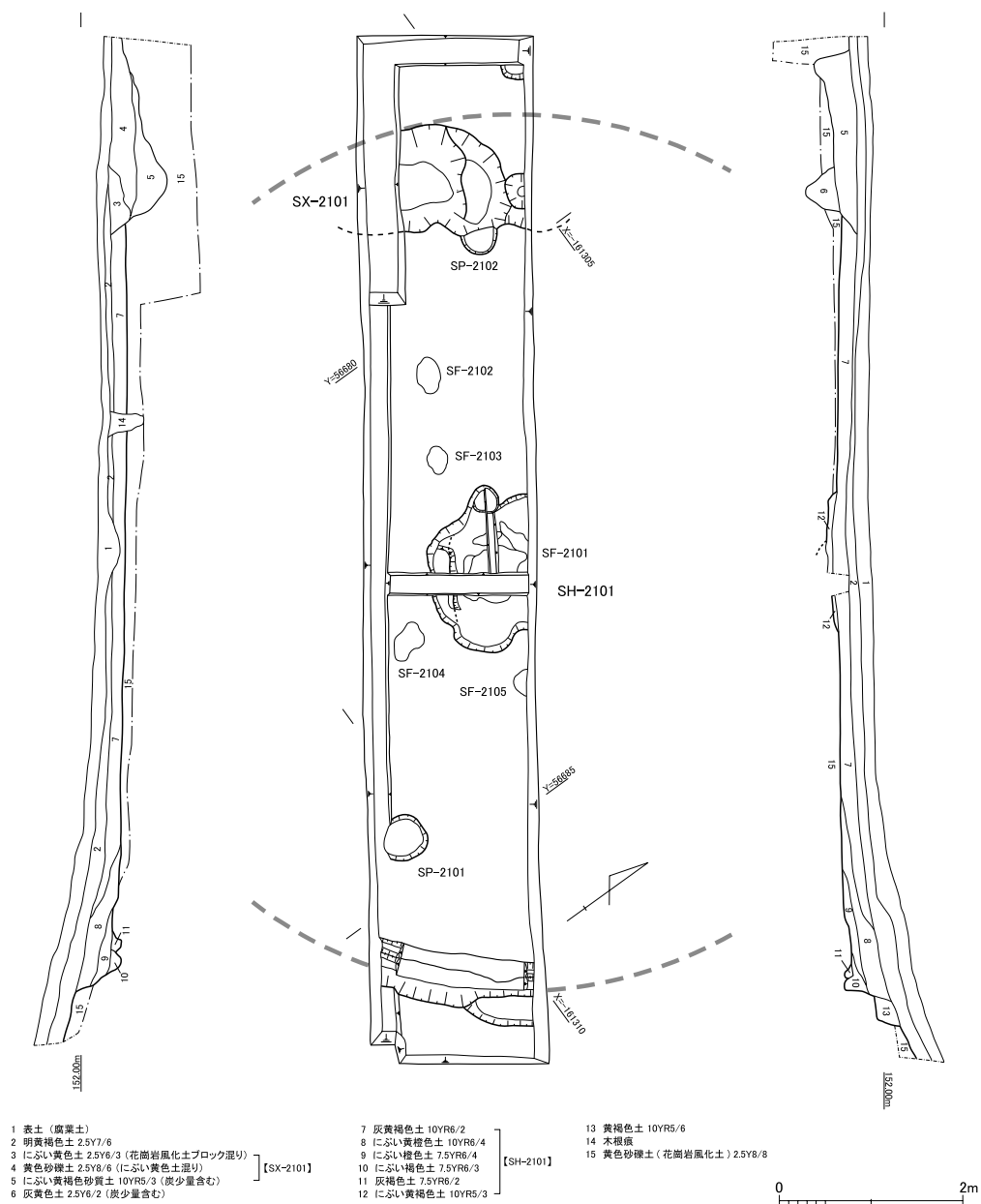


図4-2 Tr-2101 実測図

まれた落込み（SX-2101）が存在し、黄色砂礫土（4層）、にぶい黄褐色砂質土（5層）が堆積する。

（3）遺構

SH-2101（図4-2・4-3）

トレンチ北西端で検出した落込み（SX-2101）により北西の周壁が壊されているため、全体規模を実測することは不可能であるが、検出した中央土坑や柱穴の位置から直径およそ9.4mに復元できる円形の堅穴建物跡である。トレンチの南東端では、斜面を削り込んだ高さ44cmの周壁を確認した。壁裾には幅15cm、深さ5～8cmの周壁溝が二重に巡る。外側の溝が内側の溝を切って掘り直されていることから、少なくとも1回以上の建て替えが行われているものと考えられる。壁際から1.3mの場所に直径約50cmの柱穴（SP-2101）を検出した。一方、トレンチ北西端には落込み（SX-2101）が存在し、建物跡の床面が切られている。この落ち込みの断面で、西半分が壊されたピット（SP-2102）1基を検出した。直径は約40cmである。平面の形状や埋土の色調がSP-2101に似ることから、これも柱穴の一つであると判断した。これら2つの柱穴がなす平面角は160°であることから想定できる本建物の柱本数は9本である。

調査区中央の北東壁際で中央土坑（SF-2101）を検出した。検出範囲での長径は1.8mで、平面は不整形形である。検出面から上層に堆積するにぶい黄褐色土を10cm掘り下げた時点で被熱による変色面を確認した。被熱範囲の色調は大きく2色に分かれ、中央部のオレンジ色（橙色土）に変色する範囲を取り巻

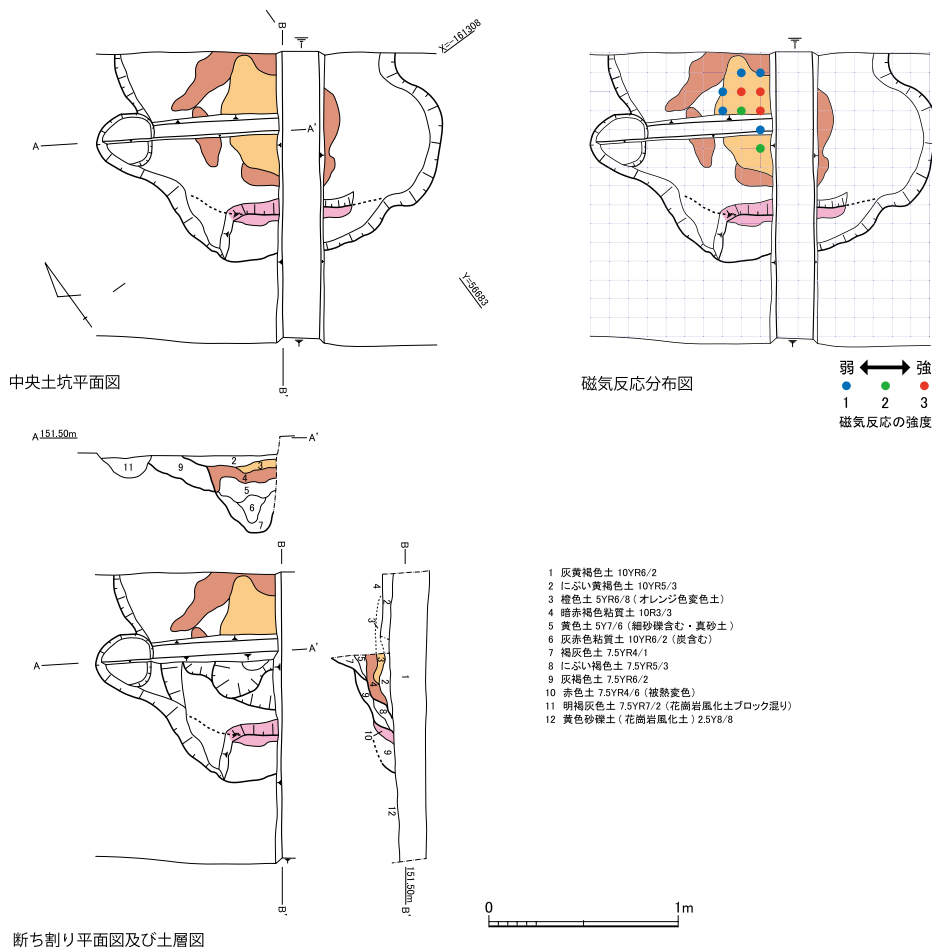


図4-3 SH-2101 中央土坑（SF-2101）実測図

くように、暗い赤色（暗赤褐色粘質土）に変色する範囲が認められる。オレンジ色の範囲の径は約50cm、暗い赤色に変色する範囲の径は約90cmである。

変色範囲の下層の状況を確認するため南西部1/4を掘り下げた結果、深さ40cmの土坑が埋まった上層に被熱によるオレンジ色の変色が認められることを確認した。土坑の直径は70cmである。被熱による変色層の厚さは約5cmである。被熱層下に堆積する土は大きく4層に分かれ、直下に堆積する厚さ5～8cmの暗赤褐色粘質土が、平面ではオレンジ色に変色する範囲の周囲を取り巻くように見えていることも明らかとなった。暗赤褐色粘質土下には黄色土（細かな砂礫を含む真砂土）、灰赤色粘質土（炭化物を含む）、褐灰色土の順に、約10cmの厚さの土層が堆積する。これらの4層はいずれも自然に堆積した土ではなく、人為的に埋められた様相を呈する。

なお、土層観察の結果、この土坑は周壁溝が掘り直されているのと同様に、少なくとも1回の掘り直しが行われていることが確認できた。先行する土坑の深さは、掘り直された土坑の方が深いため確認することができない。先行する土坑西側の肩が長さ60cmにわたって被熱し、淡い赤色（赤色土）に変色していることも確認できた。この被熱の厚さも約5cmである。このことから、先行する土坑も被熱痕が生じる状況にあったことがうかがえる。

また、本建物跡については、床面を10cm単位に区分し、各交点における磁気反応の有無を、金属探知機（BOSCH GMS120）を用いて確認した。その結果、弱いながらオレンジ色に変色した範囲だけに金属反応が得られた（図4-3）。なお、当該土層（橙色土）を除去した時点で反応が消失することも確認できたことから、オレンジ色の土層にのみ磁気反応が得られるものと考えられる。なお、中央土坑の周辺にも床面が赤く変色した場所が4か所（SF-2102～2105）確認できた。変色範囲の平面は楕円形で、最大径が30～45cmである。これも被熱による変色と想定できるが、金属探知機による反応は得られなかった。

本建物跡の床面からは、小さな鉄片5点（M1～M5）が出土していることから、これら被熱痕跡は鍛冶炉の可能性が高く、本建物跡で鍛冶作業が行われたものと判断した。

なお、中央土坑の各層から出土した炭化材の科学分析の結果、最上層のにぶい黄褐色土出土炭化材の樹種はスダジイで、放射性炭素年代測定の結果は $1965 \pm 20\text{BP}$ 、オレンジ色の被熱層である橙色土はスギで $2245 \pm 20\text{BP}$ 、その下の暗赤褐色粘質土はアカガシ亜属で $1920 \pm 20\text{BP}$ 、灰赤色粘質土はタブノキ属で $1860 \pm 20\text{BP}$ 、最下層の褐灰色土はスギで $2200 \pm 20\text{BP}$ 、先行する土坑下層の灰褐色土はスダジイで $1965 \pm 20\text{BP}$ という結果が得られた。古木効果が想定されるスギと同定された炭化材以外はおおむね1世紀から3世紀前半の年代が得られている。

S X - 2 1 0 1（図4-2）

トレンチ北西端で検出した落込みである。掘方から人為的に掘り込まれたものであると判断した。表土下に堆積する明黄褐色土（2層）下から掘り込まれ、竪穴建物跡（SH-2101）の埋土を切って掘られている。幅2mのトレンチを横断して検出されており、トレンチ北西端から2.1mの範囲に及んでいる。最深部の深さは78cmで、底は不整形である。

埋土は大きく3層に分かれ、最下層に堆積するにぶい黄褐色砂質土には小さな炭化物を含み、弥生土器片が出土した。

竪穴建物（SH-2101）が埋まって以降に掘られたことは確実であるが、掘られた時期や目的は不明である。

(4) 遺物

弥生土器

SH-2101 (図4-4 107～116)

107、111、114は中央土坑の被熱層上面に堆積するにぶい黄褐色土から出土した土器で、それ以外は堅穴建物跡埋土の灰黄褐色土（7、8層）から出土した土器である。

107は甕の口縁部である。外反しながら開き、端部は丸い。外面は縦方向、内面は横方向のハケ又は板ナデ調整である。111は甕の底部である。急な角度で立ち上がる体部は、外面が板ナデ調整である。114は高坏あるいは器台の脚部である。外反して開く脚部は、裾部がわずかに内湾し、端部に内傾する面を有する。端面に1条の擬凹線が巡る。

109、110は壺又は鉢の底部である。いずれも平底で、109の体部は内外面ともに板ナデ調整である。110は外面に指頭痕を残す。112、113は器台の口縁部である。いずれも端部下方に粘土紐を貼り付け、肥厚させる形態であるが、張り付けた粘土が剥離し、接合痕が残る。113は、内面に波状文、外面に円形浮文を貼り付け加飾する。115は高坏の脚部である。短い脚柱部は外反しながら大きく開き裾部に至る。裾部に円形の透穴を穿つ。116は土製有孔円盤である。わずかに内湾することから、土器片の周囲を打ち欠いて円形に整え、中央に円形の孔を穿ったものと考えられる。

SX-2101 (図4-4 117)

20片以上の土器が出土したが、図化できたものは1点である。117は有稜高坏の杯部である。屈折して立ち上がる口縁部は強く外反し、口縁端部は丸い。屈折度合いは弱く、稜は不明瞭である。

包含層 (図4-5 118～125)

いずれも表土下に堆積する明黄褐色土（2層）から出土した土器である。118、119、125は器台である。118は口縁部で、下方に肥厚させる端部の断面は逆三角形を呈する。端面上下に擬凹線を巡らせ、その間に波状文を施文する。119は脚部である。細く丈高な脚注部から外反して裾部に至る。外面はヘラ磨きで調整する。125は、内面が丁寧なナデ調整で仕上げられることから受部としたが、脚部の可能性もある。

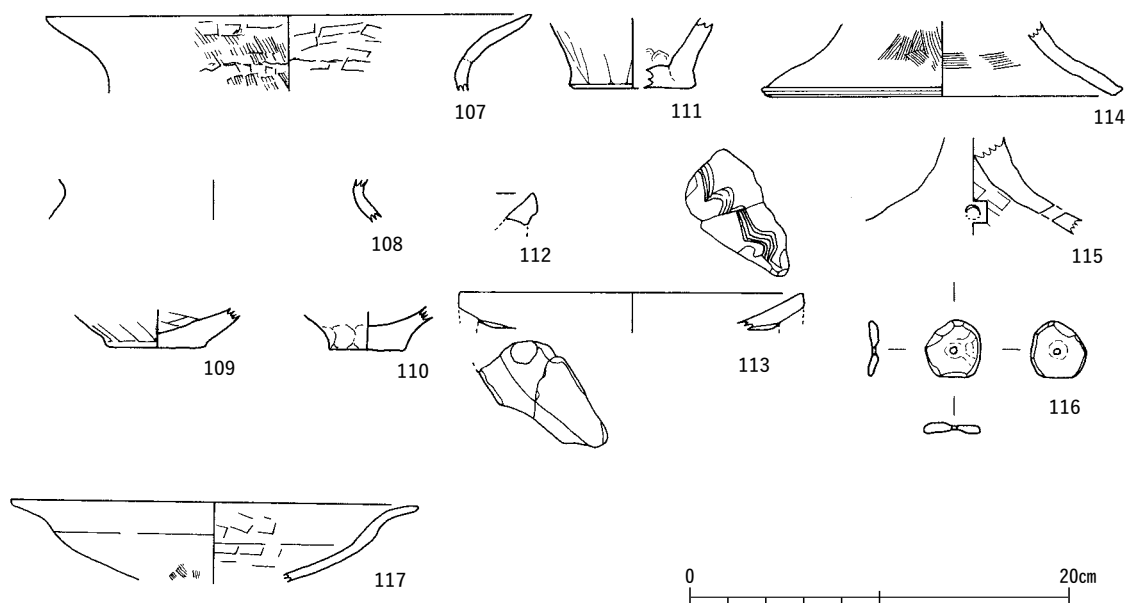


図4-4 SH-2101・SX-2101 出土土器

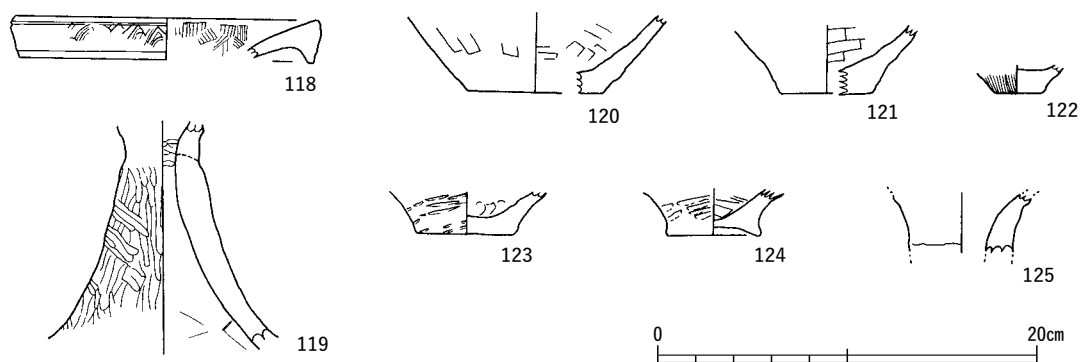


図4-5 Tr-2101 遺物包含層 出土土器

120～122は壺又は鉢の底部である。いずれも平底で、体部外面をハケ又は板ナデ調整する。123、124は甕の底部である。体部外面に叩きが残る。

石器 (図4-6 S16 ～ S18)

本調査区からは、3点の敲石が出土した。その内、S16は竪穴建物跡（SH-2101）の周壁溝の上から

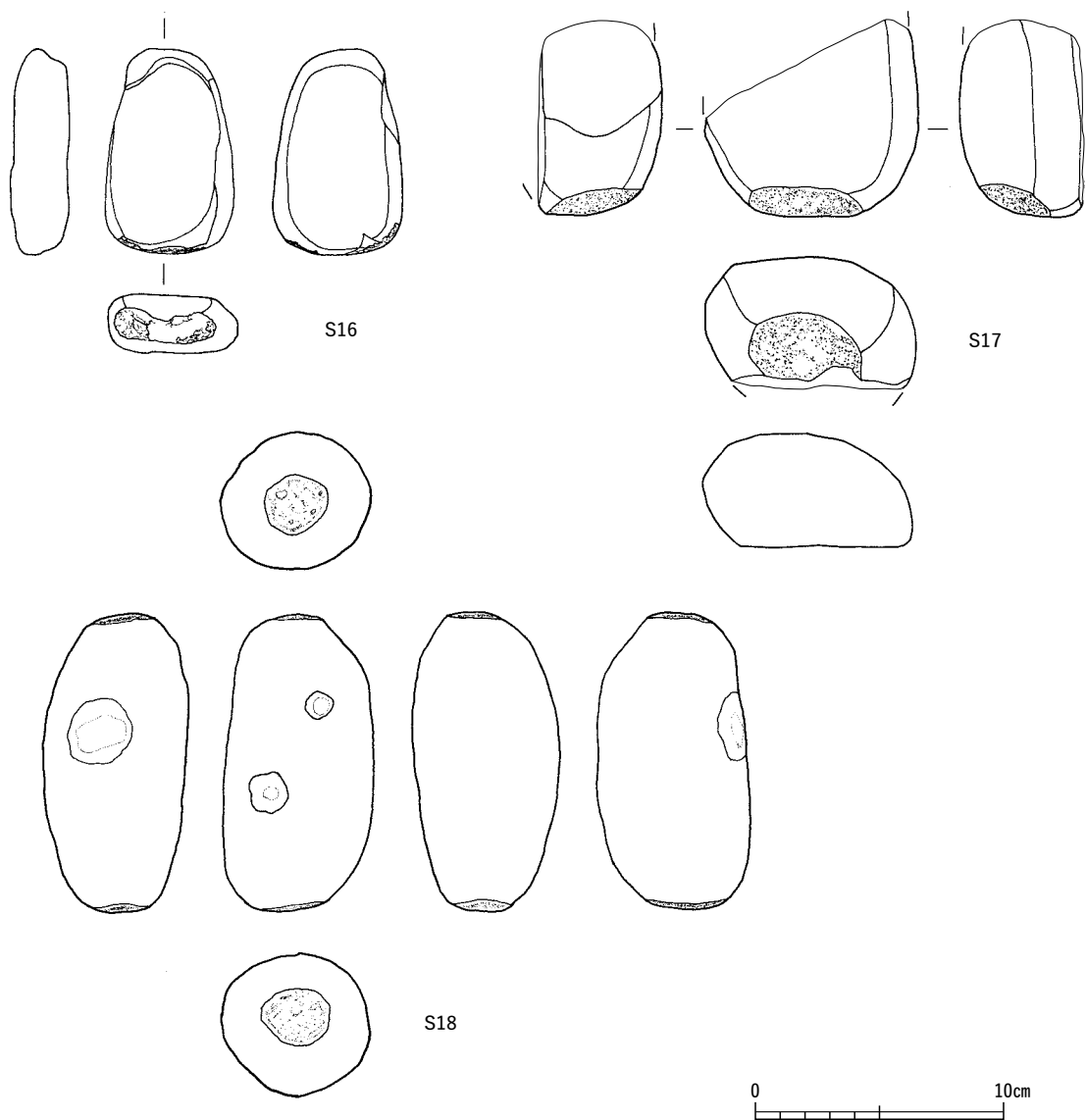


図4-6 Tr-2101 出土石器

S17、S18は落ち込み（SX-2101）内のぶい黄褐色砂質土（5層）から出土した。落ち込み（SX-2101）は、堅穴建物跡（SH-2101）を掘り込んだ遺構であることを考慮すれば、S17、S18も堅穴建物跡（SH-2101）の埋土に包含されていた遺物が落ち込み（SX-2101）を掘削する際に掘り出され、その埋土に混入した可能性もある。

S16は石英片岩製の敲石である。厚さ2.3cmの扁平な礫の下端部に敲打痕を認める。長さ8.2cm、幅5.2cmの楕円形の礫は、上端と下端の幅が異なるが、幅の広い下端部を敲打面として使用している。重さ156gの軽めの敲石である。S17及びS18はいずれも斑礫岩または角閃石岩製の敲石である。S17は、長さ7.9cm、幅8.5cmのこぶし大の円礫で、丸みを帯びた背面とは対照的に裏面は平坦なことから、断面が半円形のかまぼこ形を呈する。上端部は折れて短くなっている可能性がある。下端部は、敲打により平坦な面が形成されている。重さ469.2gの重量感のある敲石である。S18は、長さ11.8cm、幅5.8cmの中ほどが太く、両端に向かって次第に細くなる紡錘形の礫を用いる敲石である。上下両端部は、径約3cmの平坦面が形成され、明瞭な敲打痕が認められる。側面に円形のくぼみが3か所認められるが、大きさや深さは一定しない。石材のほか、両端に認められる顕著な敲打痕や側面のくぼみなど、Tr-2008で出土しているS6に類似する特徴を持った敲石である。

鉄器（図4-7 M1～M5）

SH-2101より5点出土した。M1、M2、M3は棒状の鉄製品、M4、M5は板状の鉄製品であり、いずれも破損している。M1は両端に破面をもち、その機能は不明である。横断面は隅丸方形を呈しているが、旧状は長方形であったと推測される。M2は一端に破面をもち、サビ膨れが著しいものの下端はやや厚みを減じており平刃をもつ鑿状の鉄器であった可能性がある。横断面形は長方形を呈する。M1、M2の現存長、幅、厚みはそれぞれ2.6cm、0.5cm、0.8cm、3.2cm、0.5cm、0.4cmを測る。M3は湾曲し、その両端を欠損しており、横断面形は略方形である。現存長1.7cm、厚み0.4cmである。M4は略三角形を呈し、長辺のひとつが破面を有し、破面側が対辺側よりも厚くなっている。現存長と幅は1.8cm、1.3cmであり、厚みは最大で0.5cmを測る。M5は不整形の鉄片で、長さ、幅、厚みはそれぞれ0.7cm、1.0cm、0.2cmである。M3、M5は機能を有する鉄器の破片ではなく、鉄器の素材や製作時に生ずる残片と考えられ、M2を除けば総じて鍛冶遺構から出土する鉄製品に共通している。

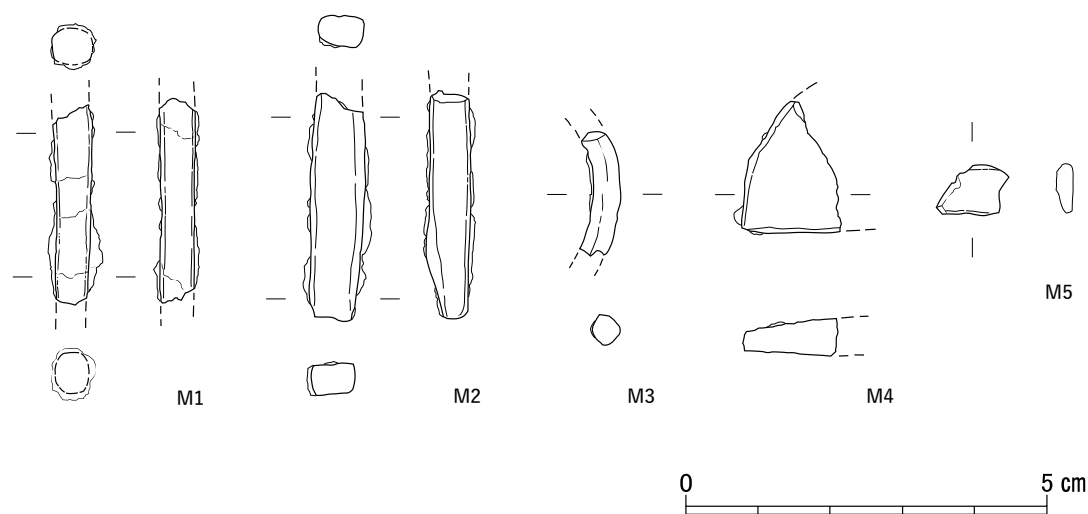


図4-7 SH-2101 出土鉄器

2 Tr-2102

(1) 調査区の概要

東西方向に伸びる北尾根先端の頂上に設定したトレンチである。頂上部の標高は153mである。馬の背状の地形の中に、わずかながら平坦な範囲が認められる。尾根筋に並行する幅2m、長さ10mのトレンチである。

調査区東端で円形の土坑1基を検出した。ガラス瓶が出土したことから、近代以降の土坑と考えられる。トレンチ西端では浅いピットを検出したが、人為的に掘られたものではない。本トレンチでは、弥生土器片1片、サヌカイト原石が出土したが、弥生時代の遺構は確認できなかった。

(2) 基本層序

厚さ10cmの表土（1層）下に、にぶい褐色土（2層）、オリーブ黄色土（3層）が堆積し、地山（7層）に至る。地山は、円礫を含む明黄褐色土である。検出した土坑（SK-2101）は3層下から掘られている。

(3) 遺構

SK-2101（図4-8）

トレンチ東壁際で検出した半円形の土坑である。東半は調査区外に広がるため、本来は平面が円形又は楕円形と考えられる。検出範囲での直径は1.2m、深さ80cmで急角度に掘り込まれている。底は平坦で、直径88cmである。

埋土は大きく上下2層に分かれる。上層には厚さ65cmの橙色砂質土が堆積し、下層には厚さ15cmの灰オリーブ粘質微砂層が底を一面に覆うように堆積する。底で検出できる地山は橙色粘質土であり、この土層堆積状況から、底には水が溜まっていた可能性がある。また、上層は短時間に堆積した様相が看取できることから、人為的に埋められたものと考えられる。5層からガラス瓶が出土した。

近くには、谷部に開墾された畑あるいは果樹園で利用するために掘られた石囲いの井戸状の構造物が残されており、本土坑も同様の機能を有した土坑と想定できる。

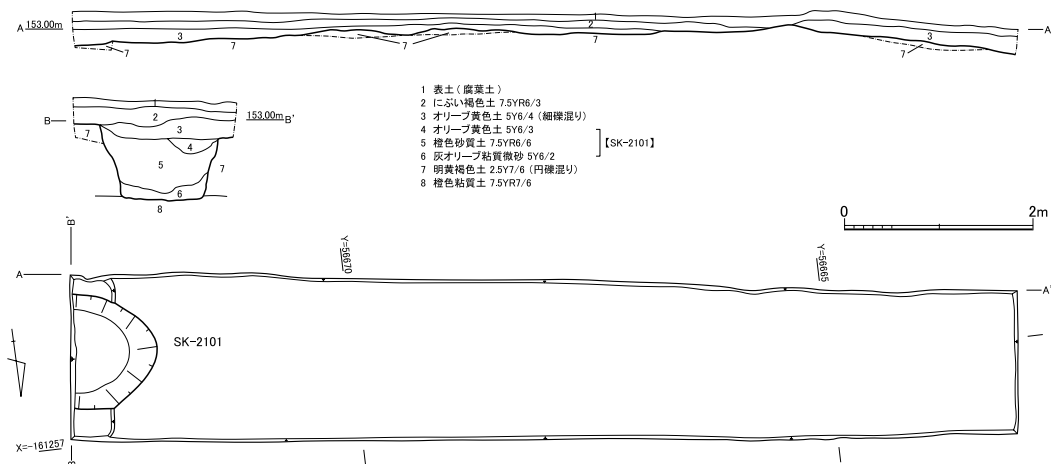


図4-8 Tr-2102 実測図

3 Tr-2103

(1) 調査区の概要

鍛冶工房と考えられる竪穴建物跡（SH-2101）を検出したTr-2101の斜面上方に設定した幅2m、長さ8mのトレンチである。尾根頂上部から北西向き斜面に直交する形で設定した。尾根頂上部の標高は158mである。

表土下から掘り込まれた落ち込み（SX-2102）とその下層でトレンチを横切る形で検出した地山を掘り込んだ落ち込み（SX-2103）が存在する。後者は弥生時代の遺構の可能性が高く、斜面下で検出した竪穴建物跡との関係性も考慮する必要がある。

(2) 基本層序

厚さ10cmの表土（1層）下に明黄褐色土（2層）が堆積し、地山に至る。地山は、円礫を含む橙色粘質土（5層）である。

(3) 遺構

SX-2102（図4-9）

トレンチ北東壁際で検出した楕円形の落ち込みである。東半が調査区外へ広がる。検出範囲での径は90cm×93cm、深さ36cmで、断面は丸みを帯びた船底状を呈する。細かな砂礫を含むにぶい褐色土で埋まる。弥生土器が出土したが、表土直下より掘られていることから、後世の掘削による落ち込みと考えられる。

SX-2103（図4-9）

トレンチを横切る形で検出した落ち込みで、SX-2102下層で検出した。等高線に沿う形で伸びており、両端は調査区外へ広がる。検出範囲での最大幅は2.8mで、斜面上方に約1m幅のステップ状の平坦部がある。深さは23cmである。2層下から地山を掘り込んでおり、堆積する浅黄色土からは弥生土器片が出土した。

斜面下には、竪穴建物跡SH-2101が存在することから、雨水などの流れ込みを避けるために掘られた弥生時代の地山加工段の可能性もある。

4 Tr-2104

(1) 調査区の概要

北尾根上に開けた標高158mの平坦部に設定したトレンチである。尾根筋と同じ東西方向に長いトレンチで、幅2m、長さ10

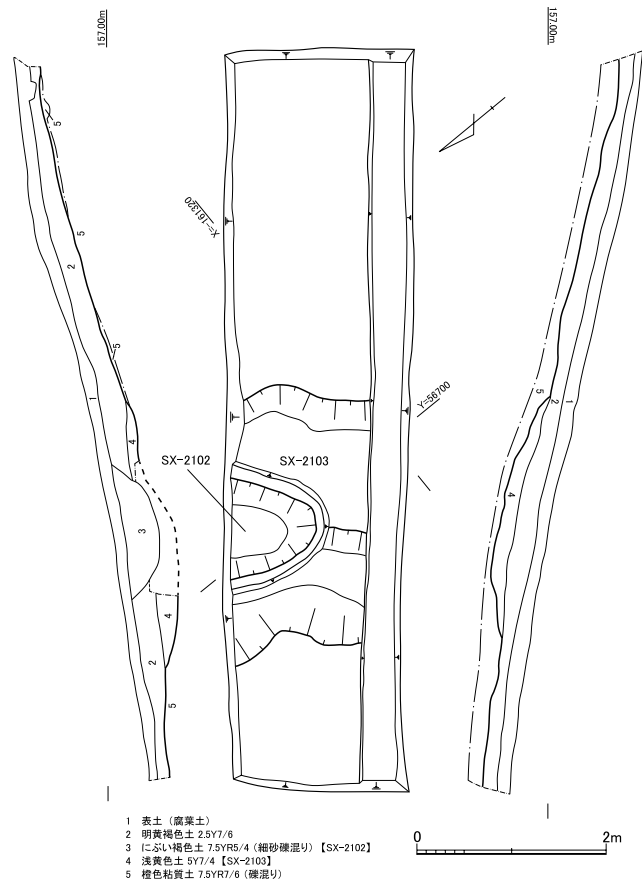


図4-9 Tr-2103 実測図

mである。

弥生時代の竪穴建物跡（SH-2102）1棟とそれを切って掘られた落込み（SX-2104）を検出した。竪穴建物跡の検出面には、建物を横切る幅約1mの溝が検出できたほか、様々な掘り込みの跡が確認できた。この溝は、尾根筋を縦断する山道が埋まったものと考えられ、現在は利用されなくなった旧道の存在を知ることができる。これら表土下で確認できる掘り込みは、かつて里山の利用が活発であった時期の痕跡と考えられる。

（2）基本層序

厚さ10cmの腐葉土を多く含む表土（1層）下に明黄褐色土（2層）が堆積し、地山（14層）に至る。建物跡を横切る溝などの掘り込みは、表土層と同じ腐葉土を多く含む土で埋まる。なお、尾根上方の傾斜地では2層が存在せず、表土直下で地山を検出する。地山は、円礫を含む浅黄色土（14層）である。

（3）遺構

SH-2102（図4-10）

直径7.7mの円形の竪穴建物跡である。斜面上方にあたる東側周壁は高さ50cm、逆の西側周壁は12cmである。壁際には幅13～18cm、深さ6cmの周壁溝が巡り、床面中央には直径約60cm、深さ35cmの中央土坑が掘られている。中央土坑上層には厚さ10cmの褐灰色土が堆積し、その下に大量の炭化物を含む黒褐色土が堆積する。検出範囲では柱穴は確認できなかった。中央部の床面及び西側周壁の一部は、後世の掘削により壊されている。

埋土である黄色土（5層）、黄橙色砂質土（7層）及び中央土坑の黒褐色土から弥生土器が出土した。なお、中央土坑から出土した炭化材の科学分析の結果、樹種はスダジイとツバキ属であることが明らかになった。また、放射性炭素年代測定の測定値は $1915 \pm 20\text{BP}$ 、 $1875 \pm 20\text{BP}$ で、1世紀中葉から3世紀前半の年代が得られている。

SX-2104（図4-10）

トレンチ中央部で検出した落ち込みである。竪穴建物跡の上層埋土を切って2層下から掘り込まれて

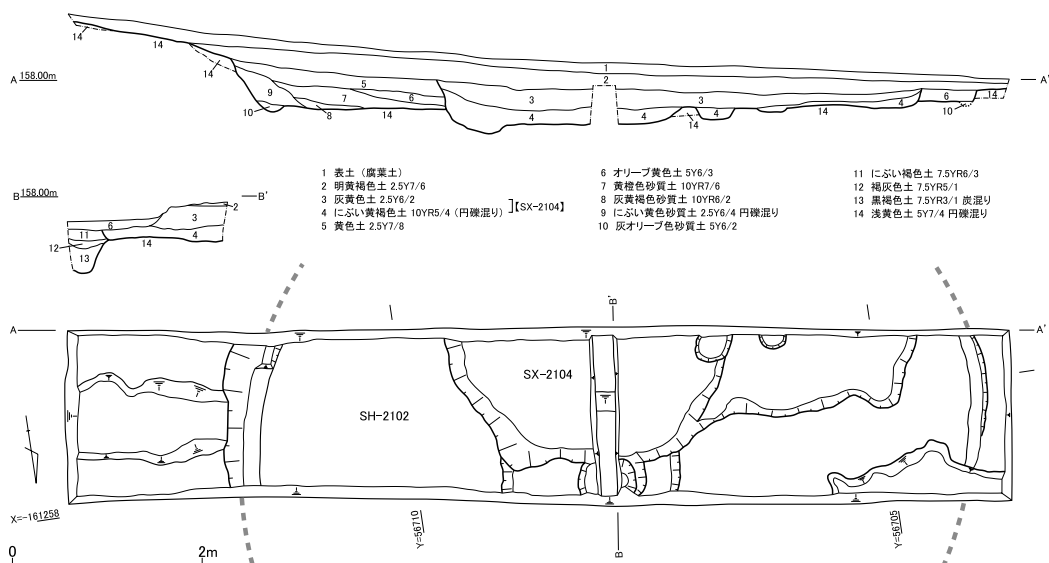


図4-10 Tr-2104 実測図

いる。平面は不整形で2段に落ち込み、底には凹凸が認められる。最深部での深さは57cmで、埋土は上下2層に分かれる。各層から弥生土器が出土した。弥生時代の竪穴建物跡が埋まった後に掘られた落ち込みであるが、出土遺物から、その時期を特定することはできない。

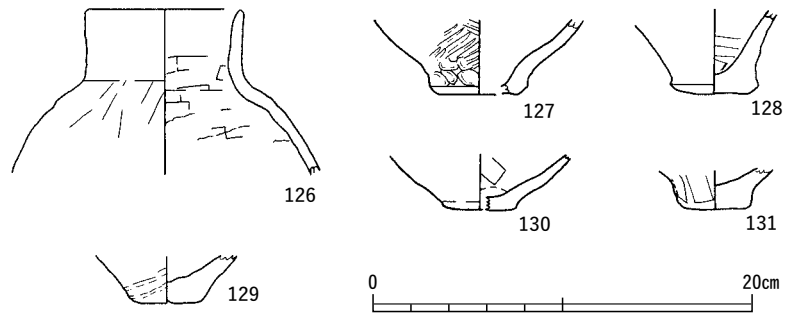


図4-11 Tr-2104 出土土器

(4) 遺物

弥生土器

SH-2102 (図4-11 127、129)

127は床面に近い黄橙色砂質土（7層）から出土した底部である。平らな底部から内湾して立ち上がる体部で、外面に叩きを残す。甕の可能性が高い。129は上層埋土である黄色土（5層）から出土した底部である。中央部外面がわずかにくぼむドーナツ状の形態で、体部外面に叩きが残る。甕の底部である。

SX-2104 (図4-11 128、130、131)

128は甕の底部である。急角度で立ち上がる体部は、内面が板ナデ調整である。130、131は壺又は鉢の底部である。わずかに突出する底部から内湾して立ち上がる体部である。体部外面はナデあるいは板ナデ調整である。

包含層 (図4-11 126)

緩やかに屈曲して直立する口縁部の壺である。口縁部から体部にかけて、内外面を板ナデあるいはナデ調整で仕上げる。

5 Tr-2105

(1) 調査区の概要

北尾根の南側斜面に設定した2m×2mの調査区である。調査地は、2本の尾根に囲まれた谷を埋めて果樹園として造成した平坦地の北端に位置し、標高は147mである。

尾根斜面に堆積した土層から弥生土器が出土したが量は少なく、遺構などは確認できなかった。尾根上には弥生時代の遺構が存在することが想定できる。

(2) 基本層序 (図4-12)

表土（1層）及びその下に堆積する灰黄色土（2層）は水平に堆積する土層であり、本地が農地として利用されていた際の耕作土と考えられる。その下には、灰黄褐色土（3層）、にぶい黄橙色土（4層）、明黄褐色土（5層）が堆積し、地山（6層）に至る。地山は、花崗岩の風化土で構成される。地山上に堆積する3層は、尾根斜面の傾斜に沿って斜め堆積する土層であるが、調査区北西範囲の地山上面が水平であり、その上に不整合に堆積することから、本地を造成する際の盛土の可能性もある。3層、4層から弥生土器が出土した。

(3) 遺物

弥生土器 (図4-13 146)

明黄褐色土(5層)から出土した土器である。甕の底部で、わずかに上げ底となる。急角度で直線的に立ち上がる体部は、外面がハケ、内面が板ナデ調整である。

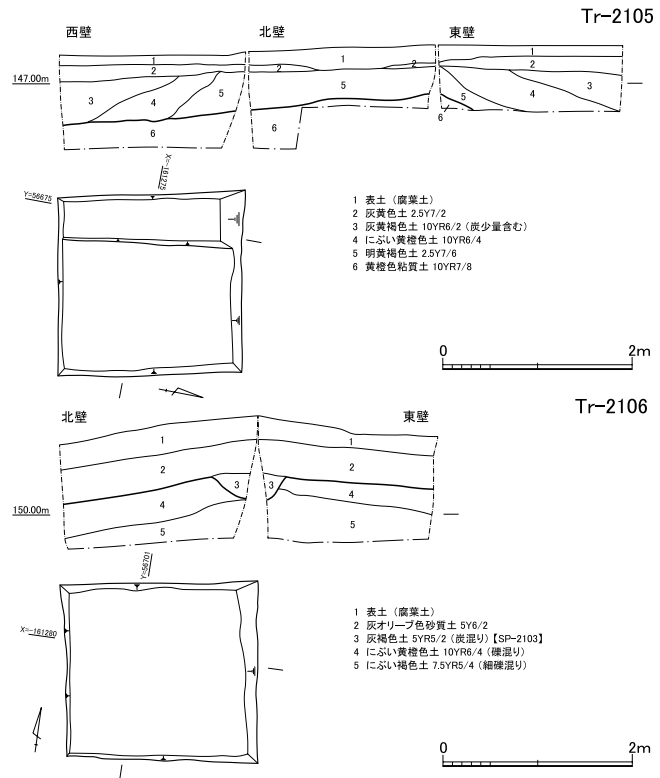


図4-12 Tr-2105・2106 実測図

6 Tr-2106

(1) 調査区の概要

北尾根の南側斜面に設定した2m×2mの調査区である。調査地の標高は151mである。調査区真上の尾根頂上に設定した調査区Tr-2104では、弥生時代の堅穴建物跡(SH-2102)を検出している。本調査区で検出した尾根斜面の傾斜は緩やかで、調査区北東隅の壁面でピット1基を確認した。ピット内から弥生土器が出土しており、当該期の遺構と考えられる。なお、本調査区で出土した弥生土器の量は、K地区の他の調査区に比べ多い。

(2) 基本層序

表土(1層)下に灰オリーブ色砂質土(2層)が堆積し、地山(4層、5層)に至る。地山は花崗岩の風化土である。

これらの土層堆積は、いずれも尾根斜面に沿って緩やかに傾斜する。4層上面から掘り込まれたピットが存在する。2層からは弥生土器が出土した。

(3) 遺構

SP-2103 (図4-12)

調査区北東隅の壁面で確認したピットである。地山上面から掘られており、深さは28cmで、掘方は比較的なだらかである。埋土は灰褐色土1層で、細かな炭化物を含む。弥生土器片が出土した。

(4) 遺物

弥生土器 (図4-13 132 ~ 145)

全て灰オリーブ色砂質土(2層)から出土した土器である。

132は壺の口縁部である。端部が下方にわずかに肥厚し、端面に2条の擬凹線を巡らせる。133は有稜鉢の口縁部である。外反気味に開く口縁部は端部に面を持ち、1条の擬凹線を巡らせる。

134~143は壺又は甕の底部である。平底の底部が多い。体部外面はハケ又はナデ調整のものと叩きを残すものがある。

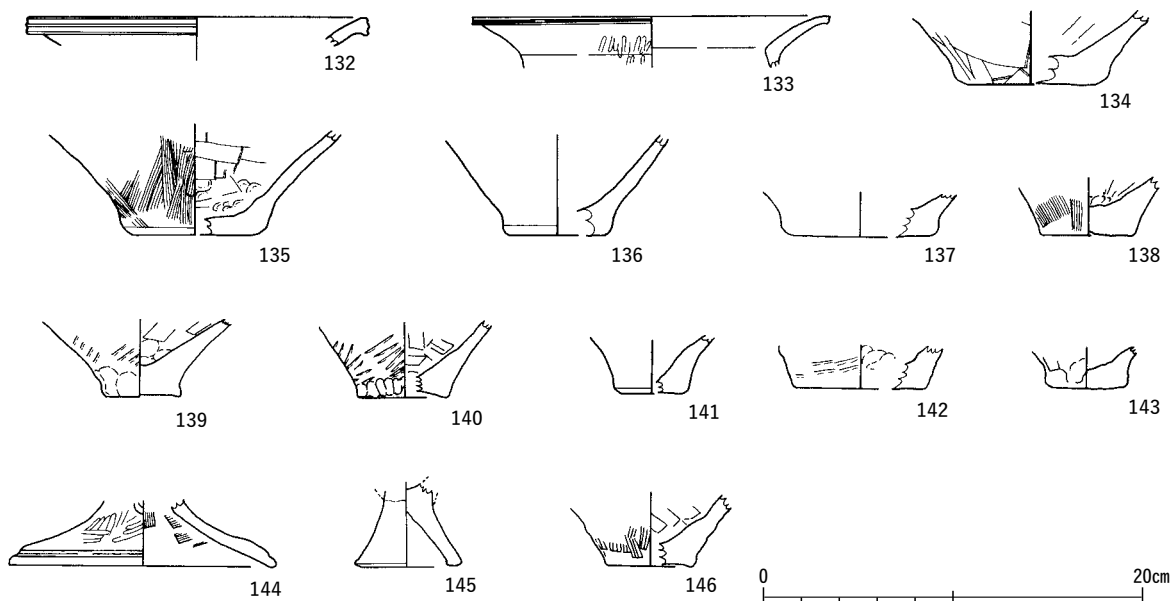


図4-13 Tr-2105・2106 出土土器

144は内湾気味に大きく開く脚部で、裾部に1条の擬凹線が巡る。低脚の高坏脚部とみられる。145は台付き鉢の脚部である。径が小さく丈高な中空の脚部である。脚端部が内側にわずかに肥厚する。

7 Tr-2107

(1) 調査区の概要

北尾根の北側斜面中腹に存在する平坦部に設定した2m×2mの調査区である。平坦部はおよそ10m四方の広さであり、標高は150mである。調査区北西隅でピットを検出したが、時期は不明である。本調査区で検出した地山面はほぼ水平であり、人為的に形成された平坦面の可能性もある。

(2) 基本層序

腐葉土を主体とした表土（1層）下に明黄褐色土（2層）が堆積し、地山（5層）に至る。調査区南西隅で、2層と地山の間に厚さ約10cmの褐灰色砂質土が存在する。地山は、橙色粘質土である。2層からは少量ではあるが弥生土器が出土した。

(3) 遺構

SP-2104 (図4-14)

調査区北西隅で検出したピットで、調査区外に広がる。平面は2基の楕円形のピットが連結した形状を呈するが、断面では同一の掘方であることが確認できる。検出面での長径は96cm、短径は42cmで、深さは18cm～34cmである。底には凹凸が認められる。埋土はにぶい黄橙色土

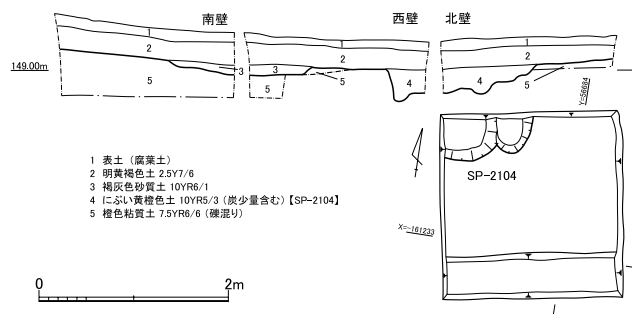


図4-14 Tr-2107 実測図

で、細かな炭化物を含むが、土器などの遺物は出土しなかった。

第3節 小結

弥生時代の遺構と集落範囲

K地区においても弥生時代の竪穴建物跡2棟を検出した。それにより、本地区にも弥生時代の集落範囲が広がっていることが確実となった。その時期は後期後半期であり、後期前葉や終末期の遺構が確認できなかった点は、前章で報告したA地区と同じである。

その内の1棟(SH-2101)は、床面に炉跡が存在すること、鍛冶具と考えられる石器が出土していること、鉄器が出土していることなどから鍛冶工房建物と評価できる。これにより、鉄器生産に伴う遺構が集落北端に位置する本地区にまで広がっていることが確実となり、集落が最大規模となった時期に集落の全域に展開していることが想定できる。本遺跡における鉄器生産を考えるうえで、重要な成果といえる。

鍛冶遺構の特徴

Tr-2101で検出した竪穴建物跡(SH-2101)は、前述のように鍛冶工房と評価できる建物跡である。床面中央には土坑が存在し、その周囲に4か所の炉跡(SF-2102～SF-2105)が確認できる。これらは、床面を掘りくぼめることのない、いわゆるⅣ類鍛冶炉に分類できる炉跡である。直径が9.4mに復元できる大型の円形竪穴建物を利用し、床面に複数のⅣ類鍛冶炉が確認できる構造は、多数の鍛冶遺構が確認されている五斗長垣内遺跡の鍛冶工房建物と共通する。

しかしながら、この建物では埋まった中央土坑の上面を鍛冶炉として利用している可能性の高いことが確認できた。それが鍛冶炉であることは、金属探知機を用いた探査の結果でも検証しており、その可能性は高い。このような鍛冶炉をもつ工房建物は、本遺跡はもとより五斗長垣内遺跡でも確認できておらず、これら遺跡において初見の構造ということになる。このような構造の炉に関する評価は、今後の検討課題ではあるが、舟木遺跡の鉄器生産を理解する上で、重要な遺構といえることができる。

鉄器

本地区では、点数は少ないが鉄器が出土している。いずれも鍛冶工房跡と評価できる竪穴建物跡(SH-2101)から出土したものであり、本遺跡での鉄器生産に関わる鉄器と考えられる。

いずれも小さな鉄片であり、鉄器生産に伴う素材や残片と考えられることから、本遺跡において生産された鉄器が、小型の製品であったことを物語るものである。その内の1点は、細長い棒状の鉄器である。幅0.5cmの断面が方形で、先端が鑿状の形状を呈することから、小型工具の可能性はある。

このように、出土する鉄器が素材あるいは鍛冶作業に伴う残片、さらに製品に小型工具が多い状況は、既に確認されている鉄器組成と同様であり、本遺跡における鉄器生産技術の一端を



図4-15 SH-2101の中央土坑

理解する上で重要な資料になるものである。

金属探知機を用いた鍛冶炉の確認

今回の調査では、金属探知機を用いた探査を実施し、鍛冶遺構の確認を試みた。金属探知機の反応は微弱なものであるが、中央土坑上面に広がる焼土の範囲でのみ確認されている。しかも、その反応は、暗赤褐色を呈する範囲に比べ、より高温の熱を受けていると考えられる橙色に変色する範囲に強く表れている。この反応は、鍛冶炉内で熱した鉄器から飛散した微小鉄片の一部が溶脱して炉床部に残ったことにより、金属反応として確認できたものと考えられる。このような調査手法は、鍛冶作業を裏付ける遺物が少ない建物跡において、鍛冶工房であるか否かを判断する有用な手段の一つになるものと考えられる。